

地震を詠んだ歌たち 大野道夫

三月十一日に大地震が発生した。その余震が続くなか近現代で地震を詠んだ歌を調べてみると、たとえば次のような歌がみられた。

- ・あふ向きて浮ぶは男うつ伏してしづむは女小きはその子か
窪田空穂『鏡葉』
- ・物あまた転げ散らばる家の中おびただしくも香水にほふ
植松寿樹『光化門』

- ・地震なの夜の寒の望月凝血のごとき光の満ちていしこと
道浦母都子『夕駅』

- ・激震なによるけつつ馬車を牽きてぬし青の臀部この闇に浮かび来
時田則雄『短歌往来』二〇〇四年九月号

空穂作、植松作は関東大震災（一九二三）の歌、それぞれ視覚と嗅覚から地震を表現している。道浦作は阪神大震災（一九九五）の歌、地震の夜の月から死者たちを表現しようとしている。そして時田作は十勝沖地震（二〇〇三）の歌、地震の瞬間を目に焼きついた馬の〈臀部〉から表現している。

ところで地震をうたった歌は自然詠なのだろうか？それとも社会詠なのだろうか？自然現象をうたった歌が自然詠、社会現象をうたった歌が社会詠なので、自然現象である地震をうたった歌は基本的に自然詠となるだろう。もちろん地震に見舞われた人々や

社会、地震によって問われた街や文明をうたう場合もあり、単純には分類し切れないだろうが。

そしてそれにはたいして戦争詠は、人間のさまざまな社会によって戦争が起こるので、基本的に社会詠といえるだろう。そして全体の傾向として、人間によって起こされた戦争を詠む戦争詠は抒情的となり、それにたいして自然現象を詠む地震詠は抒景的になるという傾向があるのではないか、と思う。また読者も、同じ災害でも、戦争詠ではどこかで戦争を起した人間などを想定して、より感情を込めて読むのではないか、と思う。もちろんわれわれにも地震を憎む気持ちはあるが、たとえばへ世をあげし思想の中にまもり来て今こそ戦争を憎む心よ（近藤芳美『埃吹く街』）のようなかたちで地震を詠むことはないのではないか、と思う。

- ・また関東大震災に際して、佐佐木信綱は次のように詠んでいる。
うせし者帰り来しごと水道の水のいでたりかたへにつどふ

佐佐木信綱『豊旗雲』

・ちりと灰とうづまきあがる中にして雄々し、都の生るる声す
ともに震災後の歌で、歌としては一首目の方がよいと思う。ただ二首目は「帝都復興」という連作の冒頭の歌で、いち早く「復興」を詠んだ歌として着目した。信綱は終戦の年の十一月にも、「新日本建設の為にいそしまむとする若人に贈る」として『黎明』を刊行している。このような姿勢は単純すぎる面もあろうが、人や自然を愛しつつ（信綱は「愛づる心」と表現している）前進し続けようとする信綱の「愛づる明治の精神」の表れとして、余震続く中で読んで励まされる気がした。これから生まれるであろう、今回の地震をうたった歌が、少しでも詠んだ人、そして読んだ人の救いになればよい、と願っている。